

特集

難治性の痛みと代替医療

---

# アントロポゾフィー医学における 痛みの本体論とその治療

堀 雅明  
堀耳鼻咽喉科医院

ペインクリニック  
Vol.29 No.3 (2008.3) 別刷

真興交易㈱医書出版部

# アントロポゾフィー医学における 痛みの本体論とその治療

堀 雅明

堀耳鼻咽喉科医院

## 要 旨

アントロポゾフィー医学における痛みの本体論について、人間を構成する4要素と、3分節の見方を解説した。アントロポゾフィー医学の治療原則は、“自然界の特定のプロセスに働く力は、類似した体内のプロセスに治療効果を持つ”であり、植物や鉱物を原料とする多様な治療薬について、症例を挙げ解説した。疼痛治療の重要な課題は、“痛みの意味”を患者本人が受容できるよう支持することと考える。そのため、薬物療法のみならず、心理療法、運動療法、芸術療法などによる統合的なアプローチが必要である。また、医師が痛みを十分理解する上で、改めて“主観性”の大切さを再認識する必要があると考える。

(ペインクリニック 29 : 325-335, 2008)

キーワード：アントロポゾフィー医学, 難治性疼痛, 代替医療

## 1. アントロポゾフィー医学とは

アントロポゾフィー医学 (Anthroposophic Medicine : AM)<sup>1,2)</sup>とは、オーストリア生まれの思想家・自然科学者であるルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner [1861-1925]) が、当時の医師らとともに創始した医学分野である。彼は、ヒポクラテス以前の古代の癒しの叡智を発掘し、また、ゲーテの自然界への深い洞察をさらに発展させ、その分野を“アントロポゾフィー”と命名した。すなわち、アントロポゾフィーとは、“人間の叡智”という意味であり、わが国では“人智学”と訳されてきた。

その基本は、“人間観と自然観の拡張”にある。すなわち、アントロポゾフィー医学では、人間には一般の物理化学法則以外に、さらに3

つの生命法則 (生命力) が協働して働き、合計4つの物理化学および生命法則により、人体が支えられていると考えている (図1, 表1)。また、身体を機能的に上・中・下の3つに分ける“3分節” (表2) という特有の分類も、同様に従来の身体観を拡げる見方である。人間以外の動物、植物にも同様に“3分節”が当てはめられる。アントロポゾフィー医学とは、このように人間観や自然観を拡張することで、西洋医学をより人間的な医療へと発展させようとするアプローチである。

アントロポゾフィー医学は、現在、世界80カ国で実践されており、ドイツ、スイスなどEU各国には28の病院や140以上の医院が存在し、統合医療の実践的アプローチとして普及しているが、わが国においては、この分野の集中研修が本年度で5年目を迎え、アントロポゾ

(Special Article) Chronic pain and complementary and alternative medicine  
The meaning of pain and the treatment on Anthroposophic Medicine  
Masaaki Hori  
Hori Otolaryngologic Clinic

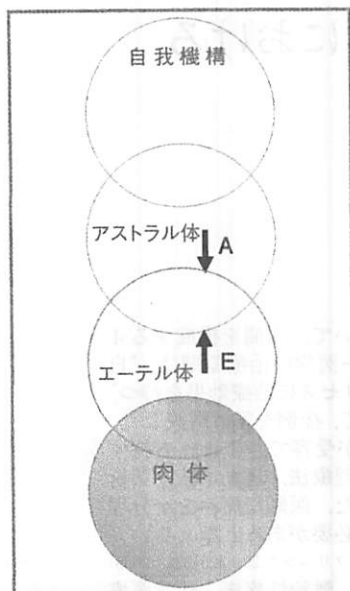


図1 4層構造のイメージ  
エーテル体の増殖・成長、そして健康への傾向Eに対して、常にアストラル体からは抑制・炎症そして病気への傾向Aが拮抗している

表1 人体を構成する4つの層

	生理的機能 (外的な機能)	主観的な体験 (内的な機能)	活動するベース
自我機構	下位の機能の統合 熱の維持	人間特有のレベル 創造性・自発性・ 生きる意味を与える 要素・次元	血液の担う熱を 通して活動する
アストラル体 抑制的↓	分化・成長抑制 異化代謝過程 呼吸・筋肉運動	感情・情動・痛みなど の内面生活をも たらす要素・次元	酸素など気体を 通して活動する
エーテル体 拮抗的↑	増殖・成長促進 同化代謝過程 ホメオスタシス	物質としての肉体 に生命を吹き込む 要素・次元	体液成分を通し て活動する
肉 体	形態と構造維持 栄養プロセス	物質的なレベル いわゆる肉体	固体を通して活 動する

表2 人間・動物・植物の3分節

	人間と動物	植 物
神経感覚系	上部機構として主に頭部に集中	根に集中
リズム系	中部機構として主に胸部に集中	葉に集中
四肢・代謝系	下部機構として主に腹部に集中	花に集中

フィー医学のための医師会が活動し始めたところである。植物・鉱物などを中心とした医薬品の使用<sup>3)</sup>や、自然観や宇宙観など東洋医学と共通した点も少なからずあり、また、multidisciplinary pain clinic<sup>4)</sup>の基本姿勢に、多くの共通点を持っている。2005年には、スイス政府健康保険局が、中立的な立場から、アントロポゾフィー医学の2,129の文献を体系的に研究評価し、HTAレポート<sup>5)</sup>がまとめられている。結果として、アントロポゾフィー医学は、治療効果が高く、西洋医学単独で行われる場合に比較して、より安全性が高く(副作用発現率0.005%)、医療費節減効果があると報告された。

## 2. アントロポゾフィー医学における 人体の構成要素と痛みの本体論

アントロポゾフィー医学では、通常の西洋医

学が注目する物質としての肉体は、他の3つの構成要素に支えられているとしている。そして、表1に示すように、この4つの構成要素のそれぞれに、生理的機能の側面と主観的な体験の側面の2つの機能が関連していると考えられている。まず、表1の生理的機能の側面から解説する。図1で示すように、肉体はエーテル体に支えられている一方で、アストラル体はエーテル体に対して拮抗的に作用し、健康への傾向(図1、矢印E)と病気への傾向(図1左、矢印A)がダイナミックにバランスをとっていることで肉体の健康が維持されていると考えている。自我機構は、下位3つの構成要素を統合している。4つの構成要素のそれぞれでは、熱、気体、体液、固体の存在が重要である。次に、表1の主観的な体験の側面から痛みの発生についての見方を紹介する。今回の「難治性の痛み」というテーマにおいて、最も重要となる構成要素が、

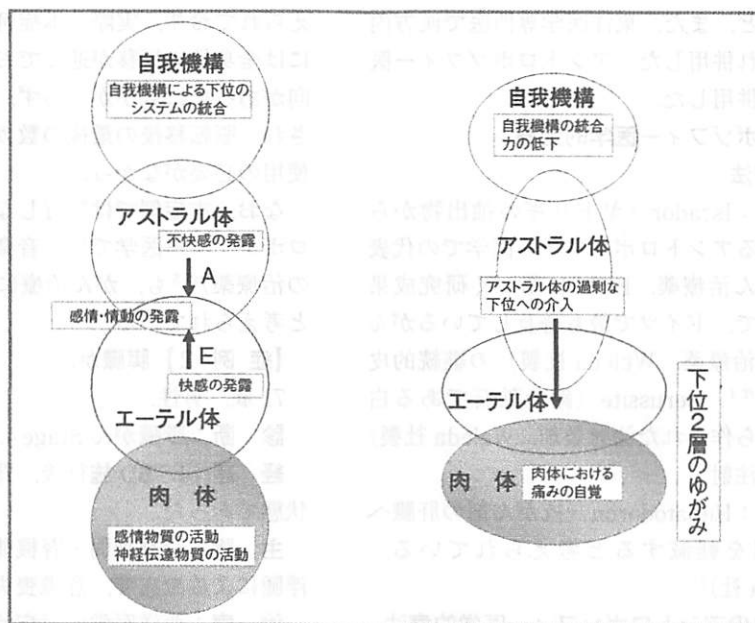


図2 感情と痛み発生の模式図

左は正常な感情の発生経過、右は痛み・苦痛に至る感情の発生の背景を示す

アストラル体であり、心理的には感情・情動と最も関連が深い。通常の感情は、まず、アストラル体が拡張しようとしてエーテル体に押し返され、均衡した時に、アストラル体で発生すると考えられている。図2左で矢印Eが示すように、アストラル体がエーテル体から適度のフィードバックを受けた時に“快感”が発生する。一方で、図2左で矢印Aが示すように、アストラル体からエーテル体に対して強く干渉を及ぼすと、“不快感”が発生する。そして、図2右に示すように干渉が過剰となり、この不快感が極まると“痛み”として実感される。アストラル体がさらに強くエーテル体を越えて肉体に侵入すると、そこに“病気”が発生する。アントロポゾフィー医学では、「痛みとは、アストラル体で発生した感情が強く自覚されたもの」<sup>9)</sup>であり、アストラル体が、エーテル体の適度な伸介を逸脱して、肉体に過剰に介入し過ぎると、肉体の形態のゆがみ・ひずみを生じ、

その結果が痛みとして自覚されると考えている。ただし、人間が自ら痛みをはっきりと実感できるには、こうしたプロセスの最終段階で、発痛物質や炎症物質などの物質レベルでの反応が生じる必要がある。一方で、こうした物質レベルの反応は、人間が人間として感情や痛みを自覚できる前提でもある。

アントロポゾフィー医学での治療を具体的に理解するために、疼痛の理解と治療において重要な分野であるがん治療の症例を紹介する。

【症例1】乳がん

63歳、女性。

診断：乳がん Stage 4.

経過：乳房切除手術後、再発し、全身骨転移した。後に肝臓転移、最終的に脳転移で永眠した。

主訴：骨転移による疼痛（特に仙骨部）。

治療：西洋医学的治療は抗がん剤投与、放

射線療法など、また、東洋医学専門医で漢方内服を処方され併用した。アントロポゾフィー医学的治療を併用した。

アントロポゾフィー医学的治療：

① 薬物療法

i) 注射：Iscador（ヤドリギの抽出物から作られるアントロポゾフィー医学での代表的ながん治療薬。EBMに基づく研究成果も豊富で、ドイツで最も普及しているがんの代替治療薬。Weleda社製の継続的皮下注射<sup>1)</sup>。Serussite（鉛の鉱石である白鉛鉱から作られた注射製剤。Weleda社製の皮下注射。

ii) 内服：Hepatodoron（抗がん剤の肝臓への負担を軽減すると考えられている。Weleda社）<sup>7)</sup>

② その他のアントロポゾフィー医学的療法

i) 運動療法としてのオリエントミー療法<sup>2)</sup> 動きの療法。患者は、17回の練習を通し、自分自身の体と心に深く向き合うことを通して、自分の心の内側への意識は強まったように感じたとの感想であった。

ii) 芸術療法としてのアートセラピー<sup>3)</sup>

色と形の療法。自分史を振り返るバイオグラフィワーク<sup>4)</sup>とぬらし絵の技法を併用した。合計6回のセッションを通し、自身の感情面に向き合い、それを表現する機会を通し、自分自身の内面への認識が深まったとの感想を得た。

解説：患者が永眠するまでの8カ月にわたるヤドリギ療法の期間中、心身両面のQOL改善とその維持がみられた。ところで、アントロポゾフィー医学の核心ともいえるのが、金属療法である。古代の癒しにおいては多様な金属が使われていた。アントロポゾフィー医学では、これらを近代の視点で復活させ、多様な製剤と様々な投与方法が確立されている<sup>3)</sup>。鉛は、生命に境界を与え硬化させるとされ、体内で照応する骨格に治療効果を発揮する。本症例で用いた鉛製剤は、骨表面のミネラル代謝を鎮めると考

えられており、実際、本症例では、治療開始時には全身骨に転移が進んでおり、疼痛の増強傾向があったにもかかわらず、次第に痛みは軽減され、脳転移後の最後の数カ月間、オピオイド使用の必要がなかった。

なお、本症例では施行しなかったが、アントロポゾフィー医学では、音楽療法（リズムと音の治療薬）<sup>5)</sup>も、がん治療においても大変重要と考えられている。

【症例2】膵臓がん

71歳、男性。

診断：膵臓がん Stage 4.

経過：PTSD施行後、腎機能低下し、末期状態であった。

主訴：全身衰弱・腎機能低下に伴う下肢の浮腫による激痛で、意識喪失が出現した。

治療：西洋医学的対症治療を併用し、アントロポゾフィー医学的治療を行った。

アントロポゾフィー医学的治療：

① 薬物療法

i) 皮下注射：Iscador（ヤドリギ）療法

ii) 外用療法：下肢への銅軟膏（Cuprum銅/Quartz水晶、Wala社製）の塗布。

経過と治療効果：軟膏塗布開始翌日より、下肢の浮腫が軽減し、激痛も消失した。その後、下肢の浮腫による激痛に苦しむことなく状態は静かに進行し、1カ月後に永眠した。

解説：ヤドリギ療法開始後数週間でQOLが上がり、意識レベルも改善し、末期にもかかわらず、一時的に家族と会話することができた。

3. アントロポゾフィー医学における治療原則

アントロポゾフィー医学における治療原則は、“自然界の特定のプロセスに働く力は、人体内の類似したプロセスに治療効果を持つ”というものである。

症例2において、銅軟膏（Cuprum：銅/

Quartz：水晶）が下肢痛と浮腫を劇的に軽減した。銅を治療に使用した記録は、B.C.1500年のエジプトのパピルスに記された記録に遡る。さらに、ヒポクラテス、パラケルズスへと続くが、その後、まったく途絶えていた。アントロポゾフィー医学では、銅<sup>9)</sup>は、金属の中でも非常に化学反応性が高く、様々な化合物を形成するが、常に本来の銅の性質を維持し続けることなどから、“受容と変容”が特徴であると考えられている。一方、腎臓は、日々、大量の血液を通過させていることや、後述するように感情との関連が深いことなどから、同様に“受容し変容する”という、銅と共通の特徴を持つと考えられる。アントロポゾフィー医学の最も基本となる治療原則は、ホメオパシー医学の「似たものは似たものを癒す」という基本原理をさらに発展させたものともいうことができ、自然界における銅という金属の特徴と、生体内における腎臓の特徴の類似性（ここでは、“受容と変容”）に注目し、銅が腎臓の機能を改善する治療薬となる可能性があるとして、多様な治療法が開発されている。

興味深いことに、妊娠中には血中の銅の含有量が増加し、これは、“胎児の受容”の背景に銅が関わっていると理解される。出産が始まると、逆に鉄の含有量が増加し、銅と鉄の全く逆の拮抗的な作用の下で出産が敢行される。

アントロポゾフィー医学では、腎臓は生体内の気体成分の調節に重要であり、“腎臓は液体を生じさせているのみではなく、反対に乾燥させている”<sup>10)</sup>と理解されている。また、“腎臓は魂の営みに生気を与える”ともいわれ、感情・情動（そして、痛みにも）に最も重要な臓器であり、既に述べたアストラル体の活動に深く関係すると考えられている。銅は、この痛みの発生源であるアストラル体の過剰な働きを緩和するので、痛みの治療において重要な位置づけをされており、全身の様々な部位に突発性に出現する痛み、すなわち、腹部仙痛や下肢のこむら

返りやその痛み、外傷性の腫脹・疼痛、リウマチ性関節痛、リンパ浮腫、循環障害などに治療効果がある<sup>11)</sup>。

また、症例2での銅軟膏の第2の成分、Quartzすなわち水晶は、自然界において、常に、一貫した形態、硬い結晶を形成して存在する。アントロポゾフィー医学では、この水晶の存在の背景に、強い力（形態を形成し、硬化させる力）が働いていると考え、人体において、同様なプロセスを伴う疾患や症状に注目し、水晶の治療薬としての可能性を探っている。アントロポゾフィー医学では、生体内では、常に頭部からの求心的な力、水晶のように硬化し形態を作り出し、過剰に働く腫瘍を形成する力が作用しており、これに拮抗するように、四肢・代謝系からの、遠心的で形態を破壊する力、過剰に働く炎症を引き起こす力が働いており、健康とは、両者の動的均衡において実現されていると考えている。生体内では、炎症を起こした部位では、どの部位であれ本来の形態が失われるが、これは、一方では、生体が構造化、すなわち形態を維持する力が弱まった結果であり、他方では、四肢・代謝系からの遠心的な力が過剰であるとみることもできる。このような考えに基づいて、Quartzはアントロポゾフィー医学的治療薬として、中耳炎、副鼻腔炎、リウマチ性関節炎、皮膚炎で、炎症を鎮め、本来の組織形態への回復をサポートすると考えられている。

#### 4. 3分節による身体の種類とその治療

##### 1) 人間の3分節の特徴

次に、はじめに示したアントロポゾフィー医学の4つの構成要素に並んで、この分野の2大概念の一つである「3分節」という考え方を紹介する。「3分節」とは、表2に示すように、人体を外観と機能の両側面から3つの分節に分ける概念である。アントロポゾフィー医学

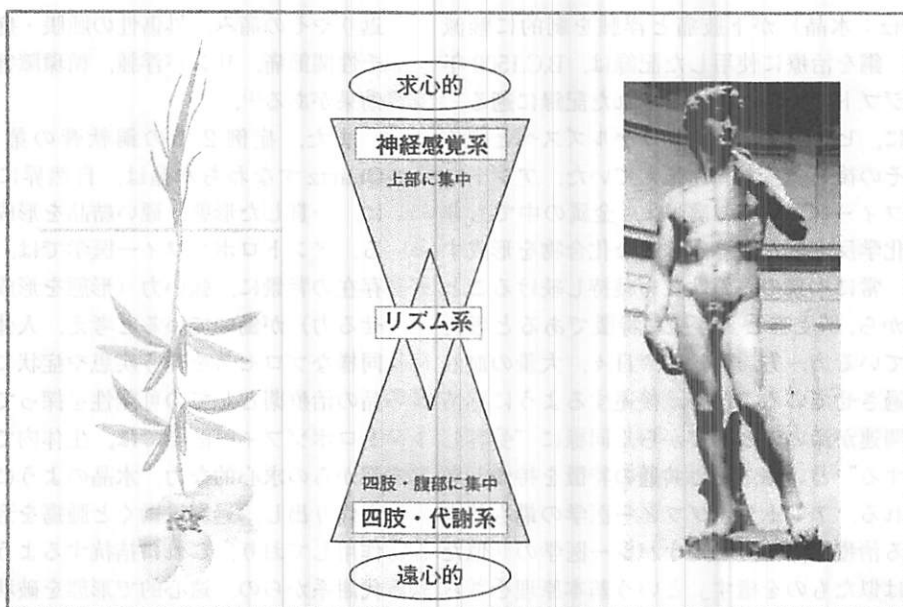


図3 植物と人間の逆転した3分節の対応関係

では、“なぜ特定の植物が、人体の特定の疾患や症状に、特定の効果を発揮するのか”という問いに、この3分節の概念から答えている<sup>12)</sup>。

図3に示すように、人間の構造と各部分（3分節）に働いている力は、典型的な植物の構造と各部分（3分節）に働いている力とは逆転した対応関係にあると考えられている。

まず、人間での3分節について解説する。「神経感覚系」については、人間の頭部から上の頭部における特徴は、可動性に乏しく、頭蓋骨の形態にみられるように球形を基本としており、臓器である脳はその内部に格納されている。神経感覚系に働く力は、例えば、両手で空中に頭蓋骨を真似て球を作ると、作用している力（形成力）は求心的（周囲から中心へと向かう）である。アントロポゾフィー医学では、この分節の大きな特徴の一つが“求心的であること”と考えている。これは、脳が機能的にも集約的・統合的である事実にも一致している。感覚・情報や食物の摂取なども、入力の一つでありこの

求心的傾向に一致する。頭部の発熱は病的な経過であり、正常では、比較的低温に保たれている。もう一つの特徴が、可動性の乏しいことである。頭蓋骨の構成骨は癒合し、脳は衝撃から守られるよう安全に格納されており、“固定性”が顕著である。アントロポゾフィー医学ではこの“固定性”を、プロセス、あるいは傾向として捉え、“硬化の傾向”が頭部に働いていると考える。そして、アントロポゾフィー医学の疾病観では、中高年期に増加するがんや関節リウマチ、高血圧をはじめとして、多くの成人病は、この頭部に強く働く硬化の傾向が過剰なために生じる疾患群であると考えられている。

一方、神経感覚系とは対極にあたる横隔膜から下方の四肢を含めた分節を「四肢・代謝系」という。その特徴は、神経感覚系とは逆の“遠心性”と“運動性”にある。“運動性”を示す四肢の骨格は、頭蓋骨の球状とは対称的に、まっすぐな長管骨で、近位端より、1本（上腕骨）、2本（橈骨・尺骨）、3個、4個（手掌骨）、

5本と数学的にも正確に遠心的に配置されている<sup>13)</sup>。また、頭蓋骨とは逆に骨の周囲に組織があり、消化管と手足にみられるように運動性と熱の発生も特徴的である。いわゆる小児期に多い感染症・炎症性疾患<sup>14)</sup>、そして後述する片頭痛も、この四肢代謝系のプロセスの過剰によって引き起こされる疾患群と考えられている<sup>11)</sup>。

神経感覚系と四肢・代謝系に挟まれる第3の分節は、「リズム系」と呼ばれ、その特徴は、「リズムと仲介」である。肺は呼吸において、心臓は拍動においてリズムを刻む。肉眼的・形態学的にも、形態が似た単純な骨格構造が繰り返される肋骨や脊椎骨も、やはりリズム的であると考えられる。アントロポゾフィー医学では、心臓は、下半身の四肢代謝系のプロセスを上半身の神経感覚系に仲介していると考え、肺は外界と体内を呼吸において仲介していると考えている。この分節に、リズムがあることで、初めて流動化し、仲介的な機能を発揮することができると考えられている。

アントロポゾフィー医学では、これら3分節の見方を通して、人間の健康状態は、神経感覚系と四肢代謝系の両極から働く2つの互いに拮抗する傾向・作用の動的なバランスの内に維持されていると考え、したがって、病的な状態については、いかにして本来のバランスを回復させるかに主眼が置かれる。

## 2) 植物の3分節とその治癒力 (図3)

次に、人間の3分節と、植物の3分節を対比する。アントロポゾフィー医学では、人間における神経感覚系には、植物の根の部分が対応すると考えている。冷たい、動かない、求心的などの特徴が一致する。人間の四肢・代謝系には花の部分が対応する。ここでは、熱、可動性、遠心性が、開花時の熱生成、花卉の開花運動、種子の散乱などに現れていると考えられている。リズム系に対応するのは、葉の部分で、典型的な葉のパターンは、多くの葉が連続的に配置さ

れリズムを特徴とする。光合成においては、肺と同様に呼吸器官に類似した機能を担っている。

こうした対応関係を基に、特定の植物が、なぜ人体に対して特定の薬効を持つかについて、解説する。

図4に、1例として、特徴的な根を持つ植物としてトリカブト(附子、キンポウゲ科、Aconite)を示す。トリカブトは、人間の神経感覚系に対応する根が、際だって肥大している。実際、鎮痛・消炎効果を持つ多くの植物が、このような特徴的な根を持っている。植物によっては、これとは全反対に、花の部分が際だったものもあり、このように、3分節のそれぞれの部位で、特定の分節に際だってアンバランスな特徴を持つほど、人間の同じ分節に対する薬効が高いと考えられている。他の漢方生薬でも、こうした効能に関連するシャクヤク、葛根、川芎、括楼根などは、特徴ある根を持っていることが知られている。トリカブトでは、さらに根が毒性を持っており、肥大した根と、毒性の発生は、根の形成において、人間の痛みの発生に密接なアストラル体の働きが過剰であることに対応すると考えられている<sup>10)</sup>。根の過剰に発達した植物は、人間の体内で同様に神経感覚系においてアストラル体の過剰となる疾患や、症状に治療可能性があるであろうと理解されている。このように、植物の外観的特徴とその毒性、さらに生態学的な生育環境(例えば湿地帯に生育するのか、乾燥地に生育するのかなど)など、背景にある多様なプロセスも考慮することで、数千種類に及ぶ医薬品が作られ、今日も開発が進められている。

ゲーテは、自然観察の分野にも多大な業績を残している。この手法をさらに発展させた植物観察をはじめとした自然観察の修練は、アントロポゾフィー医学の重要な学習課題となっている。



**【症例 3】白血病後の帯状疱疹に対するトリカブトの治療効果**

10歳，男児（在ポーランド）。

診断：白血病後の帯状疱疹。

経過：7カ月前に白血病のために化学療法を受け，緩解中であった。胸部左側に重症の帯状疱疹を発症。背景に化学療法後の免疫能低下が関連していた。激痛を伴い，受診した。患部周辺に Aconite Compositum (Wala 社) ホームオパシー注射用製剤を1日に2回皮下注射。同時に Aconite Compositum のホームオパシー内服用製剤を1日3回内服。直後より痛みも軽減し，改善良好で，2週間でほぼ完治した。

解説：Aconite Compositum の3成分のうち，前述した aconite (トリカブト) により，過剰なアストラル体による痛み・炎症プロセスを吸収・緩和したと考えられる。2番目の成分の Belladonna (ナス属) は，やはり特徴的な根を持ち，神経系と関連が深く，Aconite 同様の消炎・鎮痛効果を持つ。3番目の成分 Rhus toxicodendron は，うるし属。人によっては，さわるとひどくかぶれ，難治性の痛みとかゆみが続くことがある。アントロポゾフィー医学では，人間が“うるし”に触れた時に生じる発赤，水疱，紅斑形成の一連のプロセスと，人間が帯状疱疹を発症する時の一連の病理プロセスの類似性に注目する。化学的には，まったく無関係である2つの現象のプロセスの類似性から，治療薬としての“うるし”の可能性が検討され，実際に効果が確認された。

**【症例 4】片頭痛に対する Biodoron の治療効果**

39歳，女性。

診断：片頭痛。

経過：20歳台で発症した。NSAIDs で軽減したが，内服しても軽減せず，動けなくなることもしばしばであった。出産後，片頭痛頻度は軽減したが，症状は悪化した。NSAIDs は内服後数時間しか効果なく，頭痛が起きると，最後は

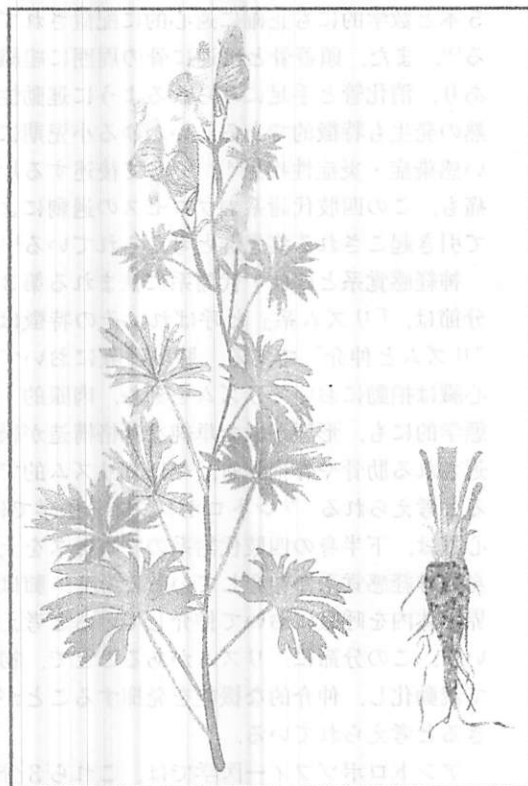


図4 トリカブトと根茎

必ず寝込む状態であった。35歳頃から，頭痛時に Biodoron (Weleda 社) を内服し (1回1カプセル，1時間ごと，1日6回まで)，カモミール・ラディックス，ベラドンナ D6 を併用。NSAIDs はほぼ使用しなくてよくなった。寝込む回数も減った。発作自体を減らすための定期内服はできず，発症頻度は変わらなかった。この間の観察で，頭痛は緊張後に出現することが多く，また抑うつ傾向と関連があり，抑うつ傾向に対するアプローチもはじめたところである。

解説：アントロポゾフィー医学では，片頭痛患者では，上部の神経感覚系の中に過剰な四肢代謝系のプロセスが進入しているとする (がんでは，全く逆のプロセスが起こっている)。こうしたアンバランスを考慮して開発されたのが

Biodoron<sup>7)</sup>である。BiodoronはQuartz, 硫黄, 鉄を含み, それぞれが“3分節”の構造に対応している。“Quartz”は, 症例2で述べたように, 神経感覚系のプロセス・機能を強め, 一方, “硫黄”は, 神経感覚系に進入した四肢・代謝系のプロセスを, 本来の形に引き戻す働きをしている。アントロポゾフィー医学では, 硫黄は, 閃光を発しながら燃え尽きる時の様子などから, 物質や形態が崩壊・散逸する傾向, すなわち遠心的な性質が, 特徴的であると考えられており, この遠心的なプロセスは, 四肢・代謝系に類似するので, 代謝系の過剰な傾向を緩和すると考えられている。“鉄”は, 神経感覚系と四肢代謝系とのバランスをとり, 他の2剤の働きを統合する。

アントロポゾフィー医学では, -dronと命名される多くの薬剤が開発されているが(Hepatodoron, Cardiodoron, Choleodoron, Renodoron, Digestoron, Menodoronなど)<sup>7)</sup>, これらは, 人間の3分節のそれぞれに対応する3つの構成成分からなり, 全身にバランスよく効果を発揮する。この点は, 漢方でいう“君臣佐使”の創薬理論に類似している。Biodoronは, 片偏頭痛に対し効果が高く, 群発頭痛の有効例も報告されている。

#### 【症例5】その他の難治性疼痛の治療例

診断: 坐骨神経痛による頑固な疼痛としびれ。

治療: 西洋医学的対症治療(整形外科)と, アントロポゾフィー医学的治療の併用。

経過: 一般的な鎮痛治療で効果がなく, 手術療法が検討されたが, 患者が拒否。

突然発生した痛みは, Solum oil (Wala社製オイル)を塗ると消失し, 減量できたNSAIDsと併用して経過観察中である。

解説: Solumオイルは, 過剰なアストラル体をゆるめ, 痛みやこわばりを解消するラベンダーの力を泥のエキスで強化した製剤で, 関節リウマチ治療にも多用される外用薬である<sup>15)</sup>。本症例では, 発作的なしびれと痛みが消失した。

ラベンダーのような紫蘇科の植物は, 可燃性の精油成分を含み, アントロポゾフィー医学では“熱の植物”とも呼ばれる。紫蘇科の植物は, 人体の4つの形成力のうち, 特に熱のプロセス・機能に関連が深いと考えられ, この熱に関連の深い“自我機構”(表1)の働きを強く活性化する。ラベンダーは, さらにアストラル体を介して痛みにも働きかける。また, 泥は, 植物由来で, ミネラル化した植物成分が, やはり自我機構の強化に作用すると考えられている。

#### おわりに

##### —難治性疼痛治療でのアントロポゾフィー医学の役割—

今回, アントロポゾフィー医学における痛みの本体論を紹介するとともに, いくつかの症例を呈示しつつ, この分野の多様な統合医療的アプローチの一端を紹介した。アントロポゾフィー医学では, 人間特有の第4の要素である自我機構の活性化が, 痛みの治療に大きな可能性を有していると考えている<sup>16,17)</sup>。人間では, 痛みを, 人生で直面する他の多くの困難と同様に, 成長のチャンスへと転換できる可能性があるからである。こうした視点に立つ時, われわれ臨床医は, 痛みに伴う苦痛を消失させる努力はもちろんのこと, 患者本人にとっての痛みの持つ意味を, 患者本人自身が気づき, 新たな成長の転機となるよう援助する必要があると考えている。西洋医学では, 医師は常に客観性のみを重視し, 一方で主観を排除してきた。しかし, 痛みという人間の最も主観的な体験を前に, われわれ医師自身も, もう一度, この主観の重要性を再認識する必要があるのではないだろうか。こうした点からも, アントロポゾフィー医学のわが国における発展は, 日本の医療の更なる充実大きく寄与できるものと考えている。

本稿を終えるにあたり、今回の症例をはじめとして、日々、多面にわたりご教授いただいているポーランドの臨床医 Dr. Robert Skawinsky, 困難な作業にご協力いただいた、昭和大学北部病院の世良田 和幸 教授、そして佐藤 公俊さん、森 章吾さん、高橋 保則 先生、浦尾 弥寿子先生をはじめとしたアントロポゾフィー医学のための医師会の同志の皆様にも、心より感謝の意を表したいと思います。

**注1：イスカドール (Iscador)**

(<http://www.mistel-therapie.de/mistletoe.html>)

この分野の代表的治療薬。ヤドリギの抽出物から作られる。この分野の先駆的医薬品製造・販売会社である Weleda 社製。基本的には、皮下注射で投与されるが、腫瘍内注射で良好な治療結果が得られた報告もある。HTA レポートでも、数多くの基礎・臨床分野の報告において、明確な治療効果が確認されている。西洋医学的がん治療との併用で、痛みをも含めた QOL が大変良好に維持できることが報告されている。また、イスカドール投与によって、セルフコントロール力（ストレスに対して積極的に対処しようとする態度）が向上することが確認されており、この薬物が、身体面のみならず、精神面にも促進効果がある、特有のがん治療薬であることが示唆されている<sup>18)</sup>。

**注2 オイリュトミー療法**

オイリュトミー療法とは、気功に類似した一種の運動療法。人間の発する子音や母音に対応して様々な身体動作が当てはめられており、その動きを通して身体の様々な機能を活性化し、患者自身が自立的に治療力を高めるよう指導される。専門の教育を受けたオイリュトミー療法士は、医師と患者との共同作業の中で、詳細な動き・ふるまいの処方指導する。がんでは、“O, E, M, L, Ei, B, D” の3つの母音と4つの子音からなる7つの音声に対応する動きを中心に練習を進めていく。がんの性質、部位、患者の課題に応じて多様な動きがアレンジされる。こうした動きの処方を通して、患者は、自身のがんに対して、文字どおり心身両面から直面し、がんの克服へ向けての心身の活性化を促進することができると考えられている。

**注3：アートセラピー**

アートセラピーでは、各人の各病期に合わせて、粘土、水彩、クレヨンなどの中から最も適

したアプローチを選択し、専門のアートセラピストとともに取り組む。がんの場合は、病気自体が硬化し硬直化する傾向が強い疾患と考えられている。したがって、アートセラピーでは、心身両面でも硬化している傾向を溶解し・流動化する方向で全プロセスが進められていく。特に、ぬらし絵という手法では、水でしめった画用紙に絵の具をのせていく方法で、固定化した心身を流動化させ再活性化する効果があると考えられている。

**注4：バイオグラフィワーク**

バイオグラフィワークとは、この分野独自の心理療法である。患者の一生にわたる自分史をふりかえり、様々な角度から光をあてることで現在の病気の意味について理解を深める。主体的・客観的な人生観を得ることにより、限られた生命の充実の助けとしていく。ここでも専門的な教育を受けたワーカーが指導に当たる。アントロポゾフィー医学では、乳幼児期から青年期、中年期、老年期のそれぞれの時期に起こったライフイベントと、疾患の発生や経過の関連に密接な関連があると考え、患者本人が、無自覚であった様々なライフイベントの意味づけをはっきりと自覚することで、病状の改善・病気の受容、さらに死の受容に大きな影響を与えると考えられている。場合によっては、家族がワークをすることも助けとなる。

**注5：音楽療法**

音楽療法とは、音楽を、声、旋律、和音、響き、リズムによって、人間の心の内部の扉を開くアプローチとして考える。音楽は理性に語りかけるのではなく、感情に語りかける。各患者の症状に従い、打楽器、管楽器、弦楽器、ライアーなどの撥弦楽器などが使用される。旋律、響き、リズムが、療法士と一緒に即興で演奏されることもあり、また患者が聞くだけの場合もある。音楽療法の目的は、患者の生命力を活性化するために、患者の音楽的リズム的能力を賦活にすることにある。生命力はどのリズム、どのプロセスによっても力づけられるからである。既に解説したように、感情面と痛みは、人間の影の仕組みでは共通した要素の両側面と捉えられる。したがって、単に物理的に痛みを除去するのではなく、その意味を受容し受け入れることをサポートするために、音楽療法も大変重要と考えられる。

- 文 献
- 1) マイケル・エヴァンス：シュタイナー医学入門。東京，群育社，2005
  - 2) Steiner R, Wegman I: Foundation of therapy. New York, Mercury press, 1999
  - 3) オットー・ヴォルフ・著，入間カイ・訳：アンтроポゾフィーとその薬劑。アンтроポゾフィー研究所，2007
  - 4) 北原雅樹：慢性頭痛の管理体制に必要な知識：米国における Multidisciplinary Pain Clinic の現状と問題点。ペインクリニック 22：611-616, 2001
  - 5) Kienle GS: Anthroposophic Medicine: effectiveness, utility, costs, safety. Stuttgart, Schattauer, 2006
  - 6) Steiner R: Course for young doctors, lecture 2. New York, Mercury Press, 1997. ルドルフ・シュタイナー・著，佐藤公俊・訳：ルドルフ・シュタイナー講演録“若い医師への講義”第2講。([http://members.aol.com/Satokimit/young\\_doctors2.html](http://members.aol.com/Satokimit/young_doctors2.html))
  - 7) Wolff O, ed: Remedies for typical diseases, concerning the remedies developed by Rudolf Steiner using new concepts and new method. New York, Mercury Press, 1996
  - 8) エース・メーファ：人智学にもとづく芸術療法の実際。東京，群育社，1999
  - 9) Pelican W: The secrets of metals, New York, Mercury Press 1973
  - 10) ヴァルター・ホルツアッペル：体と意識をつなぐ4つの臓器：肝臓・肺・腎臓・心臓－人智学的治療教育のための生理学的基礎－。東京，群育社，1998
  - 11) Glockler M: Anthroposophische arzneitherapie band 1&2. Stuttgart, Wissenschaftliche Verlagsgesellschaft mbH, 2005
  - 12) Pelican W: Healing plants. New York, Mercury Press, 1997
  - 13) メース LFC：シュタイナー医学原論，(佐藤公俊・訳)。東京，平凡社，2000
  - 14) ミヒャエラ・グレックラー・著，入間カイ・訳：小児科診察室：シュタイナー教育・医学からの子育て読本。東京，水声社，2006
  - 15) AMのための医師会：第2回国際AMゼミナール講義録。2007, 25
  - 16) リタ・ルロア・著，高橋弘子，入間カイ・訳：時代病としての癌の克服。東京，水声社，2006
  - 17) Husemann F, Wolf O: The Anthroposophic approach to medicine, Vol. III. New York, Mercury Press, 2003
  - 18) Efficacy and safety of long-term complementary treatment with standardized European Mistletoe Extract (Viscum album) in addition to conventional adjuvant oncological therapy in patients with primary non-metastatic breast cancer. Arzneim. Forsch./Drug research 54：456-466, 2004

※

※

※

# 日常歯科臨床における疼痛管理としての代替補完医療

—私は日常歯科臨床にCAMを導入してこんな効果を上げている—

福岡 明

医療法人社団明徳会 福岡歯科統合医療研究所

## 要 旨

局所的、機械論的な面の多くなりがちな歯科臨床で、患者さんの痛みや恐怖不安の除去には、東洋医学的療法を含む代替補完医療（CAM）の導入は効果的である。そのためにも、まず治療環境や接遇などで、患者さんの五感を快く刺激することが大切である。一般歯科診療所で遭遇する難治性疼痛について、単独でのCAMの適用は難しい。多くの引き出しの中から逐一選択して、また、複数のCAMを西洋医学と併用してオーダーメイドの対応をすべきである。本稿では、その対応のいくつかを、症例を示しながら述べた。

（ペインクリニック 29：336-348, 2008）

キーワード：複合的対応、専門家との協力、費用対効果

## はじめに

筆者は50余年の開業歯科医師である。30数年も昔になるが、深夜に突然苦悶の形相で来院した患者の歯痛を劇的に治した治療法は、筆者が行った歯科のセオリーにあるような処置ではなく、応援に駆けつけてくれた隣家の鍼灸師の打った“1本の針”であった。まさに目から鱗の落ちるような体験の上に、さらに、痛みを止めてもらった患者が術者に全幅の信頼を寄せ、癒す人と癒される人という理想的な医療の場を作るというすばらしさを知り、歯科臨床において、東洋医学と西洋医学の融合を実現させることが、必然的に筆者のライフワークとなった。

患者にとっては、歯科治療は“痛い、こわい!!”というイメージが拭いきれず、そのことが早期治療を阻んでいることは周知の事実である。初診患者の大半が「痛み」を主訴としていること

からも、ただちに痛みを鎮静・軽減することこそ、臨床歯科医のfirst choiceといえよう。患者の持つ歯科治療に対する緊張と不安感は大大きく、そのためにも、治療環境、接遇の仕方など、患者の五感を快く刺激することは大切である<sup>1)</sup>。

本稿では、一般歯科診療所の日常診療における疼痛管理に、いかに代替補完医療（complementary and alternative medicine：CAM）を適用しているか（図1）、難治性疼痛への対応を、症例を示しながら考えて行きたい。

## 1. 疼痛軽減の第一歩

—頸肩部の指圧マッサージによる  
心身のリラクゼーション誘導効果—

日常臨床では、実際の治療前に頸肩部の指圧マッサージすることだけでも、患者の緊張不安感を軽減できるばかりでなく、後述する観血手術による不快症状の発現を予防することができ

〈Special Article〉 Chronic pain and complementary and alternative medicine  
Complementary and alternative medicine (CAM) as the pain management in dental practice  
Akira Fukuoka, et al  
Fukuoka Dental Clinic Research Laboratory of Integrative Medicine